

以下の式辞は立教大学発行の「式辞集 2013 春」に収録された中から、立教セカンドステージ大学に関連した吉岡知哉学長（立教大学総長）の式辞をまとめたものです。



2013 年 3 月

2012 年度立教セカンドステージ大学修了式 式辞 吉岡知哉学長

## 卒業生の皆さんへ

立教大学セカンドステージ大学は、本日、本科 5 期生 91 名、専攻科 4 期生 41 名に、セカンドステージ大学修了証を授与いたします。

修了生の皆さん、おめでとうございます。

心よりお祝いを申し上げます。

覚えている方もいらっしゃると思いますが、昨年 4 月、皆さんをお迎えした入学式において、私は、2 年前の 3 月 11 日の夜、多くの帰宅困難者の方々が大学キャンパスに集まったのは、一種のアジールとしての記憶が機能したのではないか、とお話しました。

繰り返しますが、アジールとは、世俗の権力が及ばない、「避難所」、「逃避所」をさします。

中世ヨーロッパの教会や修道院、日本の神社、仏閣に、そのような特権が認められていたと言われ、「駆け込み寺」や「縁切寺」などがその例としてあげられます。

そこは、神や仏のような超越的な存在と結びついたり、異なる世界としての「異界」とつながっている、一種の聖域です。

中世の大学が、歴史的な概念としてのアジールであったのかどうかは、不勉強でわかりませんが、自治権を有し、大学の外の社会とは異なる秩序を持っていたことはご存知の通りです。

聖職者、僧侶がそうであったように、大学生は、自らの出身身分の束縛から離れて、知的な能力によって、社会的な上昇を図ることも可能でした。

その意味で、大学は、中世身分制秩序の中で、一種の風穴として機能していたとも言えるでしょう。

その後、大学は、世俗秩序を強化し、補完する機関へと変わって行きます。国家と大学との関係は、それ自体、歴史の主題として大変興味深いものですが、ここでは立ち入る時間はありません。

ただ、近代以降の大学が、研究において、産業社会を支えただけではなく、最終学歴や出身大学によって、社会の階層的な秩序を再編成し、固定化させて行ったことは、記憶しておくべきでしょう。

けれども、同時に重要なことは、それでも大学は、真理を追究し、問いをたて、その問いの根拠それ自体をも問い続ける場でもあり続けてきたという点です。

言い換えれば、大学はなお、「真理」という超越的な存在に向き合う場、あらゆる根拠を掘り崩したその先の「異界」へと通じる場所なのです。大学がアジールとしての要素を持っているのは、まさにその点においてだと言えるでしょう。

大学の中にあっては、人は「ただ学び問う存在」でありうる。

その意味で、大学は、自由で平等な場所であり続けてきました。

そして、セカンドステージ大学が、「大学」の名を自らに冠しているのは、そのような場所であろうとしているからにはほかなりません。

修了生の皆さん、

皆さんは、セカンドステージ大学の学生となる以前は、大学外の社会秩序の中に自らの位置を持ち、そこで様々な社会経験を積んでこられました。

セカンドステージ大学に入学したことで、それまでの社会的な位置とそれにまつわる様々な要素を一度放棄して、「ただ学び問う存在」となり、自分と同じ仲間が交わる場所に身を置くことになりました。

そして、真理という超越的な存在との結びつきのなかで、「異界」を覗き込み、また、自らがかつていた世界とそこにおける過去の経験を、あらためて眺め直すという特権を得たのです。

そのような特権は、まだ社会に出たことがない、若い学生はもちろん、大学のなかで日常を生きてきた教員も、持つことができないものです。

どうかこの貴重な特権を大切にしてください。

本日はおめでとうございます。



2013年4月

2013年度立教セカンドステージ大学入学式 式辞

吉岡知哉学長

## 新入生の皆さんへ

立教セカンドステージ大学はこの春、本科6期生100名、専攻科5期生52名の新入生を迎え入れます。

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

立教セカンドステージ大学は、入学条件として50歳以上という年齢制限をかけています。したがって、ここに列席しておられるほとんどすべての方々は、大学の外部の社会で30年以上、人によっては、40年、50年という年月を過ごしてきた経験を持っていることとなります。きわめて多様な経験を持った方々が、大学で学ぶという共通の目的のために、今ここに集うことになりました。このこと自体、希有なことであると言わなければなりません。

皆さんは社会人として大学の外の社会にいたときに、大学をどのようなものとして見ていたのでしょうか。

皆さんは、セカンドステージ大学への入学を志望し、現在この入学式に出席しているのですから、大学に対してネガティブな感情や考えを持っているわけではないと思います。けれども大学という組織に対しては、何らかの違和感を感じていたのではないのでしょうか。私は、ぜひ、その違和感を大切にしていきたいと思っています。

セカンドステージ大学の意義の一つは、自分がこれまで辿ってきた経験を再度辿り直し、自分という存在が何者であるのか、そして自分が生きてきた歴史が何であるのかを知ることにあります。新しい環境に置かれたときに感じる齟齬の感覚は、自分のこれまでの経験を対象化し、それを言語化するために不可欠のものなのです。

大学はもちろん、それ自体が一つの社会組織であり、社会の構成要素です。けれども同時に、社会の中にありながら、その時々、社会の支配的な原理とは異なる存立根拠を維持しています。その存立根拠とはなにか。

それは、大学は、学び、問い、考える場所だということです。あえて言えば、大学は、学び問い考えることによって生じる結果や成果ではなく、学び問い考えることそれ自体によって存立している存在です。

しばしば、大学で教わることは、個々の知識ではなく、学び問い考えるための方法だと言われるのもそのためです。

学び問い考えるためには、自由が無ければなりません。徹底的に学び問い考えるためには、無条件の自由、絶対的な自由が必要です。

自由がなければ、人間は、学ぶことも、問うことも、考えることもできません。言い換えれば、大学の自由は、学び問い考える自由に他ならないのです。

社会は一定の効率を求めます。特に、近代以降の社会は、効率を最優先する社会です。けれども、学び問い考えるためには、そもそも時間がかかります。研究・教育という営みは、速度に還元できるものでありません。大学の中に流れる時間は、社会とりわけ企業の時間とはしばしば全く異なるのです。

また、大学は、学び問い考える人によって構成されています。そこでは、人は、学び問い考える存在であるという点において平等なのです。

このような組織が、社会と一定の齟齬を来すのはそもそも当然のことだと言わなければなりません。けれども、大学は社会にとって必要な存在であり、その重要性はますます増大しています。それは、いわゆる人材育成のためだけではありません。

社会の進歩は、一方で社会の均質化や制度の固定化を生み、社会自体の活力を失わせて行く可能性があります。その中で、その時々<sup>の</sup>社会の支配的な原理とは異なる要素を持ち、異なる時間を内包するのが大学です。大学とはまさに、社会が自らの存続と更新のために、自らの中に埋め込んだ異物なのです。

21世紀になって、社会の変化のスピードが加速し、社会に余裕がなくなるにつれて、大学には既存の社会と同様の価値観と効率性が求められるようになってきました。それがどうい<sup>う</sup>ことであるのか。そのこと自体をも大学は考えなければなりません。

大学の外の社会を長く経験してきた皆さんには、ぜひ、大学に対しては良き批判者として、そして大学の外に対しては、大学の擁護者となってい<sup>た</sup>だきたいと願っています。

新入生の皆さん

立教セカンドステージへの入学にあたって、皆さんは未知の領域への好奇心に胸を膨らませ、学びへの意志を強く確認しておられると思います。

学ぶという営みは、自己の内部に複数の他者を導き入れる作業です。そのためには、自分が変化していく能力を持たなければなりません。社会での長い経験は、学びのための多くの入り口を開きますが、同時に、自己の変容の際の桎梏にもなりえます。どうか柔軟な思考力を鍛えてください。

17世紀の思想家、トマス・ホップズが、主著『リヴァイアサン』のなかで、好奇心 *curiosity* について興味深い定義を与えています。

「なぜ、いかにして、ということを知ろうとする「欲求」が、「好奇心」である。これは「人間」以外のいかなる生物のなかにも存在しない。したがって、人間は、理性を持つことによってだけではなく、この特異な情念を持つことによっても、他の「動物」からは区別さ

れている。動物においては、食欲やその他の感覚上の快楽が支配的であるために、原因を知ろうとする関心はどこかへ行ってしまう。このような関心は心の情欲であり、継続的にかつ飽きることなく知識を生み出す際の絶え間ない歓喜によって、いかなる肉の快楽の、短時間の激しさをも超えるものである。」(Thomas Hobbes, Leviathan, PartI, Chapter6)

動物に好奇心が無いかどうか、疑問を呈する方もいらっしゃるかもしれませんが、「なぜ、いかにして **why and how**」を原因にまで遡って検討したいという強い欲望は、確かに人間に固有のものであるように思われます。

皆さんもどうか、好奇心を持続させて、学ぶことの歓喜を味わってください。

入学おめでとうございます。